



## 👁️👁️ みどころ

年末年始の「里帰り」とUターンラッシュは日本の風物詩だが、トルコからドイツに出稼ぎ労働でやって来た後、定住してしまったイルマズ家はなぜ家で「里帰り」を？三代にわたる一家ともなれば移動はマイクロバスだが、その距離は一体何百キロ？

観光立国宣言をした日本への観光客は2013年にはやっと1000万人を突破したが、戦後ドイツの移民政策に対して島国ニッポンの移民政策は？少子高齢化と核家族化が急速に進む日本は、本作を参考にしながら「あるべき移民政策」を議論すべきでは？

もっとも、そんな難しいことは何も考えず、国際的ホームドラマとして本作を楽しむだけでも、安モノのTVドラマとは一味違う教養とセンスが身につくはずだ。



## ■□■同じ「里帰り」でも、スケールが国際的！■□■

2014年1月3日の早朝、東京のJR有楽町駅前で起きた建物の火災事故によって、山手線等はもちろん、東海道新幹線にも運休が相次いだ。そのため、故郷へ「里帰り」していた人たちのUターンの足に大きな影響が生じた。とはいえ、これは日本だけのごく内輪の話題。ホントは、「中国軍 有事即応型に」「7軍区を5戦区へ」「陸軍主体を転換」「海洋強国化 日米に対抗」「勝てる軍隊」具体化へ」「中国軍機構再編」「西太平洋まで覇権狙う」(2014年1月1日付読売新聞)などの重大な話題にもっと目を向けるべきだ。日本ではお正月とお盆の「里帰り」は見慣れた風景だが、さて本作が描く、おじいちゃん

フセイン・イルマズ（ヴェダット・エリンチン）を中心とし、その長男ヴェリ、長女レイラ、次男モハメド、三男アリやその子供たちという三代にわたる十数人の、ドイツから故郷トルコへの「里帰り」は？

東京・大阪間は距離にして約550km、時間にして新幹線のぞみなら2時間33分だが、ドイツとトルコは一体何キロ離れているの？また、バスでの移動には一体何日かかるの？したがって、このような故郷への「里帰り」が日常的なものでないのは当然だ。ドイツに移り住み、がむしゃらに働いて家族を養ってきたイルマズ家の当主フセインが、年齢も70歳になり、大家族のおじいちゃんになった今、突然、「故郷の村に家を買ったから皆でトルコに行ってみよう！」と「里帰り宣言」をしたのは、一体なぜ？



監督：ヤセミン・サムデレリ 2011年製作・ドイツ映画  
配給：パンドラ DVD発売：TCエンターテインメント

(c) 2011 Concorde Films

## ■□■読み応えのあるコラムがいっぱい！■□■

本作のパンフレットには、①池内紀の「異文化に生きる知恵」、②渋谷哲也の「一つにして多様な映画の世界へートルコ系ドイツ人の映画」、③ヤセミン・サムデレリの「祖父への用い」、④武田歩の「語られなかったエンジンの物語ーアナトリアのオヴァージュク」、⑤田中千世子の「おじいちゃん力」という5本のコラムが掲載されており、それぞれ読み応え

がある。とりわけ、③は、本作を監督・脚本した本人のコラムであるうえ、本作は、「言葉の分からない国に来た祖父母の原体験」を孫娘の視点から描いた映画だけに、本作と、おじいちゃんへの熱い想いが伝わってくる。

核家族化し、お正月を一人で迎えている若者が多くなった日本では、本作のような三世代にわたる大家族の良さはなかなかわからないだろうが、なぜフセインのようにトルコからドイツへ移民した男が、ドイツでこんな大家族を形成することができたの？それを、こんなパンフレットを熟読しながらしっかり考えたい。

## ■□■ドイツの移民政策とは？VS日本の移民政策■□■

大阪では生野区を中心として三代、四代にわたる韓国人社会が形成されているが、日本はずっと移民の受け入れには消極的。2003年の「観光立国宣言」以降、「景観法」の制定を含む景観整備の努力によって（実は、そういう努力の効果よりも円安効果の方が大きいかもしれないが）、2013年はやっと年間1000万人の観光客を呼び込むことができたが、観光客誘致と移民は大違いだ。ヨーロッパには、『ロルナの祈り』（08年）（『シネマールーム22』133頁参照）、『この自由な世界で』（07年）（『シネマールーム21』247頁参照）、『随天使のパスポート』（02年）（『シネマールーム6』156頁参照）など、移民問題をテーマにした名作が多い。それはイギリス、ドイツ、フランスなどの国が戦後ずっと移民問題に悩みながらも真剣に取り組んできたためだ。

しかして、戦後のドイツは、資源や資金以上に必要とされた労働力を移民に求めたらしい。そのことは、前述①の池内紀の「異文化に生きる知恵」を読めばよくわかるが、そこで意外なのは、スペイン人やイタリア人などヨーロッパ人の移民ではなく、トルコ人が多いこと。トルコ人は、イスラム教徒が多いし、食べ物や風習が違うから、その受け入れは難しいのではないかと思うのが普通だが、トルコ人は「異文化に生きる知恵」が豊富らしい。中東のイランで、きな臭いにおいが漂う今、本作のような映画を観れば、トルコ人の勤勉さや人懐っこさなど、日本人と共通する多くの面に親近感を覚えるのでは・・・。

## ■□■ドイツへ移住した頃の子供たちは？■□■

本作は、三世代にわたる家族が登場するから、その人数が多くなるのは当然。そのうえ現在のイルマズ一家と1960年代半ばにトルコからドイツに移り住んできたイルマズ一家をオーバーラップさせながら、同時進行形でストーリーを描いていくから、日本人にはその人間関係の理解が難しいかもしれない。しかし、子供時代から太っちょの長男ヴェリ、子供時代から眼鏡をかけ、控え目で不器用な次男モハメド、子供の頃は女ゴミ収集人になるのが夢だった長女レイラ。この3人のイメージは大人になってもそのまま引き継がれているから、そこに注目しながら本作を観ればわかりやすい。

ドイツへ移り住んだ頃のフセインが生活を維持していくのに苦勞していたのは当然だが、そこで目についていたのは長男ヴェリと次男モハメドの言い争い。狭い一台のベッドの中で反対方向に寝そべり毛布を取り合っている風景は貧しい家族ならどこにでもあるものだ

が、その後のヴェリとモハメドの成長は？

## ■□■あの子供たちは、あの孫たちは、今どのように？■□■

ヴェリは現在妻との間で離婚の危機が迫っているようだし、モハメドは現在失業中らしいから、この2人は大人になっても大変。マイクロバスでの里帰りの旅をみていると、あれから半世紀を経た今でもこの兄弟の仲はあまり良くないようだ。また、ドイツで女性のゴミ収集人の姿を見つけたと単純に喜んでいた長女レイラも、今は22歳の孫娘チャナンの母。自分の苦労を娘にさせまいとチャナンを大学に行かせ、自由な生き方をさせようと努力していたが、今のチャナンは？

長いマイクロバスでの旅の中では当然いろいろな騒動が持ち上がってくるが、このチャナンはずっとふさぎ込んでいたから、何かの問題を抱えていたことはまちがいない。休憩中に一人浮かぬ顔をして座っているチャナンに対してフセインがやさしく声をかけたが、そこでフセインが見抜いた妊娠騒動とは？ひょっとしてチャナンは、せっかく大学に行かせてもらっているのに、勉強そっちのけでイギリス人の恋人と恋模様一色に・・・？

## ■□■自分は一体どこの国の人なの？■□■

本作は、前述③のヤセミン・サムデレリの「祖父への弔い」のコラムに詳しく書かれているように、フセインの孫たちの目からみたトルコ系ドイツ移民の三世代にわたる家族の生きざまを、楽しいエピソードをちりばめながら描いたもの。脚色はされているが、そのネタはすべて現実に自分たちが体験したものだ。

本作でフセインと共に第2の主人公ともいうべき役割を担うのが、6歳になるフセインの孫のチェンク（ラファエル・コスーリス）。チェンクの父親であるアリはフセインがドイツに来てから生まれた男の子で、ドイツ生まれだがトルコ国籍。しかし、その妻のガビはドイツ人だから、その一人息子のチェンクはトルコ語よりもドイツ語の方が得意らしい。すると彼は、トルコVSドイツのサッカーの試合では、一体どちらを応援すればいいの？また、学校の黒板に貼られた地図上には、チェンクの出身地であるトルコの片田舎は載っていないから、チェンクは肩身が狭いらしい。そんなチェンクは6歳にして今、「自分は一体どこの国の人なの？」というアイデンティティの悩みに直面していたが、これに対して両親やフセインはどのように回答すればいいの？

## ■□■イルマズ一家だって、ケネディー家のように・・・？■□■

昨年11月にアメリカの第35代大統領ジョン・F・ケネディ大統領の娘であるキャロライン・ケネディ氏が駐日アメリカ合衆国大使として日本に赴任してきたニュースが日本では大々的に報道された。これは1963年に暗殺されたケネディ大統領の人氣が今なお高いことを物語るものだ。アメリカにおけるケネディ家は、悲劇的要素をたくさん孕みつ

つ、その一家の活躍ぶりはすごい。

しかし、よく考えてみると、ケネディー家だって1849年にアイルランドからアメリカに渡った移民一家。ジョン・F・ケネディの父ジョセフ・P・ケネディは、アメリカ移住後の三代目だ。そうすると、本作に見るイルマズー家だって、フセインとファトマが一大決心をしてトルコからドイツに移り住んだ後、今はこれだけの大家族を形成しているのだから、その孫であるチェンクの代以降がドイツの政界に進出し、アメリカにおけるケネディー家と同じようになる可能性だってあるのでは・・・？



監督：ヤセミン・サムデレリ 2011年製作・ドイツ映画  
配給：パンドラ DVD発売：TCエンターテインメント

(c)2011Concorde Films

## ■□■あなたは核家族がいい？それとも大家族がいい？■□■

ところが、少子高齢化と核家族化が同時平行的に進んでいる日本では、今後ケネディー家やイルマズ家のような大家族が形成される可能性はほとんどない。昨年大みそかの紅白歌合戦は、50年間も紅白に出場し続けた北島三郎が紅白を「卒業」というネタもあって、後半の視聴率は44.5%に上った。しかし、大みそかの夜は一家そろってこたつに入って紅白歌合戦を観るという、昭和の高度経済成長時代の代表的風景は今や完全になくなっている。しかして、あなたは核家族がいい？それとも大家族がいい？

たしかに本作を観れば、大家族の良さが実感できるが、それを懐かしむだけではダメ。こんな映画から元気をもらいながらも、今の日本は核家族になっていることを前提として、新たな家族の絆のあり方を考えていかなければ・・・。

2014（平成26）年1月7日記